

第25回 国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議  
（令和元11月18日）における展示に係る有識者からの主なコメント

<展示全般の在り方>

- ・情報、キュレーションあたりが今変わりつつあり、資料の価値、歴史、意味づけだけではなくて、それをどう社会的なテーマにつなげるのか、ストーリーに載せていくのか、見ている人と個人のつながりをつくるのか、そこが今、すごく重要になっている。（内田）
- ・説明型・一方向型の展示ではだめだと、体験型、参加型、双方が他の展示ということ……気にしながらやっているところ。（久留島）
- ・ジェンダー的視点……それから、少数民族的視点というのをどう組み込むか、この辺りがなかなか難しいが、問題になっているところ。（久留島）

<高齢者・障害者対応>

- ・基本的に、車椅子の対応はしている。（久留島）
- ・視覚障害者の方のためには、点字パネルを設置している。盲学校を対象としたプログラムも実施しているが、そう簡単には実現しない。（久留島）

<外国人対応>

- ・多言語対応で、常設展のテキストも先週オープンした展示から中国語に対応している。（内田）
- ・オンラインでのQRコードなどで情報のカバーをなるべくしていこうとしている。（内田）
- ・4カ国対応（日本語、中国語、ハングル、英語）も今、だいぶ充実しているが、それぞれ（の文字サイズ）が小さくなるという矛盾。それをどうするかということで、留学生の方たちと一緒に、それぞれの国の展示案内、自分でみどころをつくってもらって、持って回るペーパーにして持っていただくようにしている。（久留島）

<小・中学生対応>

- ・小・中学生が楽しむようなプログラムとして、やはり、どうしても必要なのが人間との触れ合い。（久留島）
- ・先生が重要。現場の先生が、やはり歴博が好きで、歴博を見てくださっていると、実は見学が非常に、レベルが高くなる。（久留島）

### <展示技術>

- ・今、デジタルコンテンツ、インタラクティブな情報機器…プラス、空間の演出とか光とか音……プラス、……触覚とか、しいてはにおいととか、あじとか、そういうものも展示空間に染み出てきている。(内田)
- ・映像だとか、照明だとか、音響技術、デジタル技術、は日々変わっていて、私たちが5年前に一生懸命、これは新しいぞとやったものが、もう既に古い、それにどう追いついていくかというところが、実は大きな問題(久留島)
- ・スマホの活用も、私たちはやっているが、そう簡単ではない。(久留島)
- ・実施設計の段階では、建物としては、結構フレキシブルに電源がとれるようにとか、ケーブルが敷けるようにというようなことだけやっておけば、あと、3年、4年後くらいに機材を選んだり、どういう演出をするのかということで、かなり柔軟に音環境もつくれるかと思う。(内田)

### <展示解説>

- ・どうやっても解説は小学生向きあるいはそれ以下と、成人向きと専門家向きに分けざるを得ないのかもしれない。重層的な構造にするしかない。(久留島)

### <常設展示の時代区分>

- ・(国立歴史民俗博物館では、)通史展示ではない。5時代区分(先史・古代、中世、近世、近代、現代)…を継承している。(久留島)